

12月の安全運転のポイント 平成2年12月号

交通事故の原因を探っていくと、ほとんどの場合、“ヒューマンエラー”といわれる人間のミスで起こっています。運転は「認知」「判断」「操作」という手順で成り立っていますが、ミスはこれらいずれの手順においても起こります。そこで今回は、それぞれの手順でどのようなミスが起こっているのかをみてみましょう。

「認知ミス」の事故パターン

「正しく見る」ことは難しい

安全運転は、道路状況や交通パートナーを見ることから始まりますが、正しく見ることは意外と難しく、“見落とし”や“見誤り”など、認知ミスが原因の事故は「判断」「操作」ミスに比べ多くなっています。人間が目を動かさず見える範囲を視野といい、両眼の視野は約200度ありますが、色彩まで確認できる範囲は左右それぞれ35度程度で（図1）、それ以外の範囲では動かないものは認識しにくくなります。

視野に係わる事故には、次のようなものがあります。見通しのよい交差点で、同じ角度・速度で接近してくる交差車両と出会い頭衝突（同じ角度・速度だと動いていないように見えるため認識しにくい）（図2）

交差点を右左折するとき、自車と同じ方向から道路を横断してきた歩行者を見落とし衝突

正しく見るために、目を動かすだけでなく、安全確認する方向に顔を向け、より広い範囲を見るようにしましょう。

注意力低下で「見れども見えず」状態に陥る

歩行者などに目を向けていても、漫然と運転していたり、考えごとをしていると、注意力が低下して危険が目に入っていないことがあります。

注意力低下に係わる事故には、次のようなものがあります。

仕事や家庭で悩みや心配を抱えていたため、考えごとをしていて前車の減速に気づかず追突

前車に追従して信号待ちをしていたとき、信号が青に変わったので漫然と発車したところ、まだ発進していなかった前車に追突

ハンドルを握ったら運転に集中し、周囲の状況をしっかりと見るようにしましょう。

図1

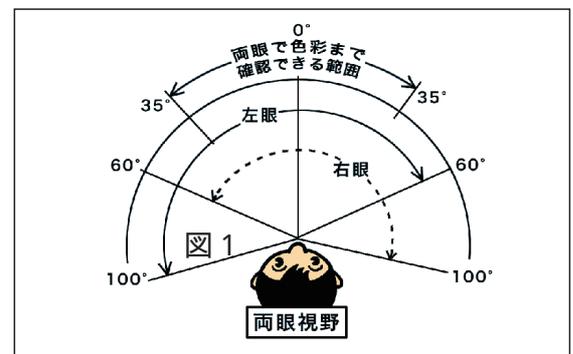
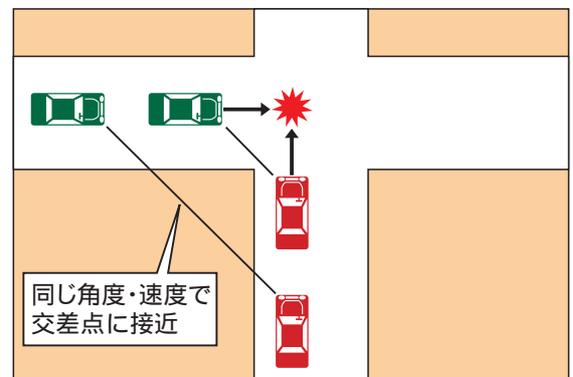


図2





「判断ミス」の事故パターン

「だろう運転」が誤った判断を招く

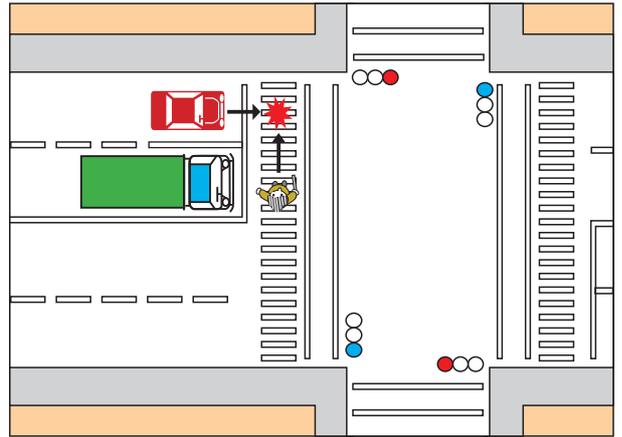
事故を起こした運転者が、「まさか飛び出してくると思わなかった」と話す様子を目にすることがあります。自分に都合よく「~だろう」と考えることは、誤った判断の原因になります。

「だろう運転」に係わる事故には、次のようなものがあります。

片側2車線の交差点で、信号が青に変わったので「安全だろう」と思い発車したところ、隣車線のトラックの死角から横断してきた歩行者と衝突(図3)

高齢者が自転車を見ているので、「横断してこないだろう」と思っていたところ、横断を始めたため衝突
運転中は、常に周囲の危険な運転場面、危険行動などを想定(危険予測)し、十分に安全確認をしましょう。

図3



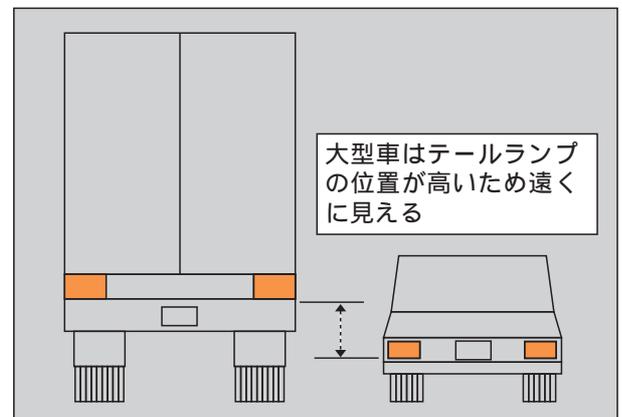
安全に関する知識不足で判断を誤る

相手を認知しても、安全に関する知識が不足していたため、見え方などの判断を誤ることがあります。

知識不足に係わる事故には、次のようなものがあります。

二輪車は実際より遠くに見えることを知らず、交差点で対向二輪車より先に右折しようとして衝突
テールランプの位置が高い大型車は実際より遠くに見えることを知らず、夜間、前方の大型車との車間距離があると思ってスピードを上げたところ追突(図4)
安全運転には知識も必要です。安全運転に関する情報に接する機会を大切にしましょう。

図4



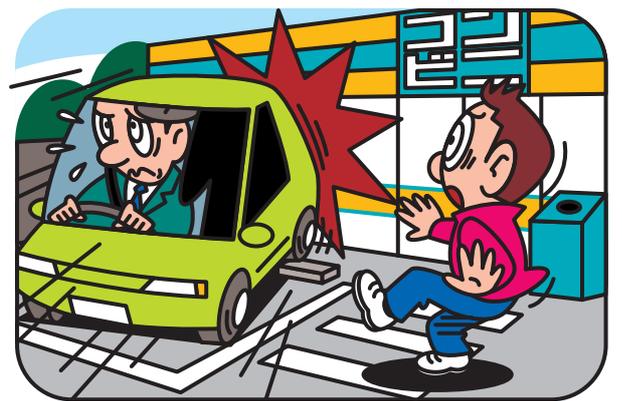
「操作ミス」の事故パターン

操作ミスは、スピードオーバーなどによる車両コントロール不能、運転の未熟、思い込みや慣れによる不正確な操作などが原因で起こります。

操作ミスによる事故には、次のようなものがあります。

速いスピードでカーブに進入し、路外逸脱
狭い道で対向車とすれ違うとき、ハンドルを左に切り過ぎて側溝に脱輪

前進しようとして誤ってシフトレバーをバックに入れてアクセルを踏んだために、後方の歩行者などに衝突
運転経験が多い人も少ない人も、自分の技量を過信することなく、常に安全運転を心がけましょう。また、発進や駐車などをするとき、その前にひと呼吸おいて基本を守った確実な操作を行いましょう。



「ご相談・お申込先」